

# 盆踊口説 「与十秀浦心中」

佐藤 勉

速見郡地方の盆踊りの口説は、旧幕時代に作られたものが殆どである。口説の内容は、芝居や浄瑠璃のストーリーの「佐倉宗五郎」「中将姫雪貴口説」「石道丸刈萱道心」「巡礼お鶴」等があり、これ等は旧日出藩内全域で普遍的に口説かれている。これに対し、八坂村（杵築市）の「阿南清兵衛」、藤原村（日出町）の「孝子伝蔵」、大神村（日出町）の「与十秀浦心中の話」等は、その村で起こった事件に基づいて作成され、口説かれてきたものである。

ここで取り上げる「与十秀浦心中の話」は、文化六年（一八〇九）六月二十五日に起こった心中事件で主人公の藤井与十と遊女秀浦が心中した日出町大神地区三尺山樋ノ口には、兩人の碑が現存する（写真）。碑は自然石

の台石の上にあり、台座が高さ二七五ミリ・幅三八五ミリ、頭身が高さ六八〇ミリ・幅二二五ミリである。

碑の前面には

一 乘慈船信士

一 慕妙蓮信女

向かって右側面には

文化六己巳年

六月二十五日

向かって左側面には

兩蒙座長崎同園生到于此

横死為令知後來其故

見常楽海牛叟誌矣

と彫刻されている。また、墓前には二体の石仏が祀られ、心中した兩人を象っているような感を抱かせる。

碑銘にみられる「海牛和尚」は日出町大神中村にある

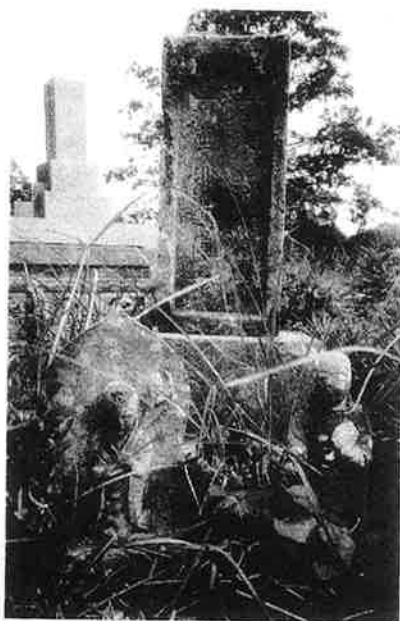
満花山常楽寺の七代住職である。常楽寺は、大友兵庫頭頼泰の三男大神朝直が、父頼泰の菩提を弔うため頼泰の謚の常楽院殿の名をとって建立した寺である。大友氏の除国と大神氏の滅亡後、常楽寺も衰微したが、社鱗知的

という僧と大神村庄屋大神嘉右衛門によって、同寺の伽藍の一部（阿弥陀堂）が、正徳元年（一七一）九月五日に再建された。この知的により七代後の住職が「海牛和尚」である。海牛は老朽化した本堂や庫裏を再建する等常楽寺の経営に努力した僧であった。海牛は天保九年（一八三八）十一月十五日に遷化し寿齡は不詳である。この常楽寺の過去帳を見ると、文化六年六月二十五日の項に、

一乗慈船信士 文化六年己巳六月二十五日

藤井与十郎 肥州ノ人

と記録されていた。しかし、秀浦の「一莖妙蓮信女」の記録はなく、これについては、秀浦が遊女であり、浜脇より深江の店に派遣されていたことから、浜脇の請手となり、浜脇の寺院に送籍されたか、生誕地の長崎に送られた結果と考えざるをえない。



墓碑

この口説は、村役人として検死・調査に立ち会った、堀忠作によって作られ、忠作の家の壁に書かれていたというが、大神仲村地区にあった堀家を取り壊した際に、壁も一緒に取り壊されてしまったという。尚、心中に使われた与十の刀は「米国俊」と伝えられている。

与十、秀浦心中の話

国は豊国日出領内の

一の港の深江において

元の起りを尋ねて聞けば

藤井与十という土は

武芸書き読み風雅の道も

同じ長崎丸山町の

剛功発明諸人にすぐれ

諸芸余さぬかの秀浦が

親は都の武家浪人よ

貧がよしない路銀に迫り

辛い勤めはうき川たけの

昔、西施か楊貴妃姫か

時はみな月半ばの祭り

何れ劣らぬその中にも

あれが聞ゆる秀浦なるか

思いそめしが因果の始め

暮をまちかね丸山かよい

速見郡とやこれかんだんの

与十秀浦心中の話

肥前長崎西上町の

剛功発明諸人にすぐれ

諸芸余さぬ当世男

時の評判秀浦こそは

漢字書き読み琴三味線も

生れ筋様を尋ねて聞けば

落て諸国を遍歴するに

終に此家とより放たれて

身とはなれども名は長崎の

小野の小町の再来なるか

祇園参りに群衆をなして

目立つ秀浦与十が見初め

遊女なりとて恋慕はんと

与十その俣我家へと帰り

忍ぶ雪駄の音たかたかと

急ぎや程なく蛭子屋につき  
聞いてやりくるやりての茂六

それに与十がいひ入るやうは

今宵秀浦さしあひなくば

出して給われ頼むといへば

さしは御座らぬ早お入りと

二階座敷に通しておいてお

茶や煙草や火等やあげと

いふて茂六は秀浦部屋へ

申し秀さんお客がござる

吾妻下りの業平様を

見たるやうなるお客といへば

秀は惣身もの嬉しげに

身ごしらへして座敷に出る

夫に与十がいひ入るやうは

去年の頃よりそもの噂

聞いちゃいれども今宵が初

声が聞きたさ会たさ見たさ

聞いて見たのがかの時鳥

慕ふ私の心のうちを

お祭し玉へと声柔らかに

云へば秀浦申せし事にゃ

私風情の賤しきものを

慕ひ玉はる心の程を

身にも余りて嬉しさどうも

いはれませぬといふ其内に

やりて茂六が出て云やうは

酒のお娯やお有用意

太鼓もちやら舞子に芸者

次に控へてゐますと云へば

そこで秀浦申せし事にゃ

今宵お客にや騒は入らぬ

皆を帰せよ してその後で

涼みがてらにあの縁端で

お茶をたてます用意をせよと

いへば茂六は茶呑みの道具  
和物オランダ唐高麗の

そこで秀浦身をとりなほし  
そつと差し出すその品方を

飲んで気もはれ心も雲も  
連枝比翼の縁結びして

丸い話でもつれつよれつ  
月の山端に寺々の鐘

明日の夜を待つ早おん出と  
思い忘れぬ与十は尚ほも

闇も月夜も雨風の夜も  
そこで秀浦申せしことにや

月日送るがのう情けない  
下女へなりとも水しなりと

つかい玉へとうらみの言葉  
すぐに亭主を座敷によんで

身受けしたいが辺はどうと  
そこで与十が申せし事にや

残る五十両は当冬までと

風炉や鍮子や水差茶入れ  
名ある器をはやとり出し

余り嬉しの上茶をたてて  
与十嬉しさとする手も早い

晴れて今宵は十五夜の月  
二世もかはさぬ心のせいし

話積りて夜もふけゆけば  
もはや今宵は帰にやならぬ

後で秀浦与十がことを  
秀にあいたいいやます恋の

身をもいとほぬ丸山かよい  
堅い約束していたずらに

若しやあなたに奥様あれば  
身受けさんしてお側に近う

聞くに与十はげに尤とも  
なんとお亭主かの秀浦を

身受けなさるりや金百両と  
今宵手付に五十両入るる

のべて玉へよお亭主様と

いへば亭主も承知の態で  
勝手次第におんめしつれよ

暇乞して蛭子屋いでる  
下女を一人さし添へおいて

さしも名高い秀浦なれば  
身受けしたとの評判あれば

御一門衆が皆うちよりにて  
遊び女に気を奪われて

家の名が立つ家名の汚れ  
聞いていながら不埒の事よ

思い切らねば勘当なりと  
親に背けば必ず天の

恐ろしきをも弁えながら  
思い切られぬ窓路の闇と

阿呆はらひにはや追出せば  
之を片身となげつけければ

腰にさすがは土なれば  
急ぎ秀浦住家に行けば

今宵お出はなせおそかりし

秀が身の上今晚よりも  
いへば与十は打喜んで

秀が住家やはや借り入れて  
榮耀榮華の暮しとなれば

藤井与十がかの秀浦を  
いつか親御のお耳に入りて

与十よく聞かせてそこ許は  
身受けしたとの評判あれば

四書や五経の講釈までも  
とかく遊女に添う事ならぬ

いへば与十がうつむきながら  
悪み受けては吾行末が

恋は心のほかとはいえど  
父は聞こえた大畜生と

母は名残りのさす一腰を  
与十とするよりおし頂いて

思い切りてぞはや出てゆく  
そこで秀浦申せしことにや

常にかはりて御気色わるい

いへば与十がさていふ様は  
阿呆ばらいに勘当された  
吾はすぐさま他国にゆく

そちが身受けをした其故に  
兎角この地に居住はできぬ

あなた難儀はみな私ゆへ  
仕度急いですぐそのままに  
さても之より何処に行かん

いへば秀浦申せしことにや  
つれて他国をして給はれと  
落ちて行くのも不憫なれ

さても之より豊後の国を  
迫る節季に気はせきどろの  
其方身受けの五十両の金も

どこをあてともなき旅の空  
指て行くのが道はるばると  
そこで与十がさて云ようは

これはどうせうのう秀浦と  
又も私の身を売り放し  
いへば与十は嬉しさつらさ

冬を限りに送らにやならぬ  
いへば秀浦思案を作り  
金のさいかく致しませうと

病なしとは世のたとえなり  
そこで義理たち男もたつと  
そこで秀浦申せしことにや

金を受取り与十に渡す  
人を仕立てて故郷に送る  
松浦小夜姫私の心

石に等しくお前もどうぞ  
咲いて咲かせつそれ楽しみに  
便りまぢますもうおさらばと

辛抱しやんせ再び花を  
されば竹田に知る人あらば

後で与十はさて伝手おひて

それを頼りに早や思ひ出づ  
急ぎ程なく竹田の町に

町で名高いかの五ツ家に  
しるべたのんで奉公つとめ

番頭奉公に落付きければ  
与十もとより柔和な生れ

氣質人あい店にぎやかに  
なれば亭主もうち喜んで

店や勝手の世話事までも  
与十次第とうちまかせける

そこで秀浦かの明石屋で  
あたり評判名も聞こえける

あいをへだてて深江の浦は  
上下出入りの商船あまた

これに秀浦はいりくれば  
都育ちの長崎女郎

町も田舎も大評判で  
肌も汚さぬ貞心貞女

妻にあいたさ見たさのあまり  
清き心の住吉様に

願ひ届いて竹田において  
与十俄に妻秀浦に

逢いたさみたさにやるせがのうて

すぐに与十は急病のかまえ

ひまを願ふて入湯すると  
急ぎや程なく浜脇浦に

宿で様子を尋ねて聞けば  
妻の秀浦さてこの頃は

深江出店に行てゐますと  
力なくなくそ夜はとまる

すぐに翌朝浜脇立ちて  
知らぬ深江を尋ねてくれば

すでに深江の西浜町に  
その名塩屋の彦九郎として

時の顔やくさばけた男  
それに宿りて秀浦よんで

殊になれたる内儀のおおい 裏の座敷に毛せん敷いて

酒や肴を早持ち出づる さしつさされつ内儀のおおい

夜の浜風立つ波の音 いとど涼しき虫の音聞いて

今が故郷の榮華にまさる 已にこの日も又明日の日も

前夜おぼへず日は重りて 七日七夜もあげずめにて

もはや竹田に帰らにやならぬ

明日は立ちますいざ何事も

今宵しまひをつけねばならぬ つもる花代宿払ひまで

勘定通りにしきりをすませ もはや立ちますお亭主様と

秀も内儀も座につらなりて 一ツまいれとさす盃を

かたじけないとおし頂いて 喉ごひして早や出て行く

秀は後より駒下駄はいて 名残おしさに見送りてゆく

見立て見送り羊の歩み ついに江上のある川端で

これが二人の三途の川と 渡りかねては立ち止まりて

そこで二人が手に手をとりて そこで秀浦申せし事にや

おみに分かれてただ片時も

生きてゐる気はわしや泣きじやくり

つれて他国をして玉はるか 又は手にかけて殺しておくれ

後を見返りあれみやしゃんせ 今が血死期ぞあの松山が

死出の山じゃと下駄ぬぎ捨てて

いげもかづらも波分けゆけば

少し小高い場所あれば これが二人の身の捨てどころ

東をむいては法華経を唱へ 西をむいては南無阿弥陀佛

そこで与十がさていふようは 国を出る時母御の形見

そこでその時死ねとの事を 知らで今まで生き永らへて

親に背いた其天罰で 逃れがたない今此の太刀で

死ぬる吾身が不義不忠者 秀は死をまつこれ与十さん

おくれ玉ふな仕損じまいと いふて振上げ力みし腕を

名残おしさに又ひかへしは 昔熊谷勇時でさえも

敵の大將敦盛公を どこそ刃のあてさきがない

言ひし心を感じてみれば 今日この今まで愛したそもじ

いへば秀浦申せしことにや 卑怯みれんは何事なるぞ

吾も元より武士の子なれば 自害するると刃にあがる

其手おさえてもうこれ迄と ぐっと一突き息絶えにける

返す刃で腹一文字 切りて喉に突きつらぬけば

流石武士気丈な始末 頃は六月下旬の五日

深江上の樋の口山で これは天晴れ無双の心中

あとは声々追手の人数 ここやかしこと見つけて廻る

死骸見つかり大声あげて

ここじゃここじゃといふその声を

聞いて集まる追手の人数 無残なりけりこの場のしだら

とても返らぬ事なりければ やがて村内常楽寺とて

時の住職大和尚さん それに頼んで弔いをして

二人一緒に石碑を立てて 人の噂にさてのこりけり

別府の伝説

## 霊泉・霊湯

掘 藤吉郎

### 参考文献

『日出町地方史料集成1 大神村史 草案』佐藤 曉編

日出町地方史料刊行会 一九八四年

『大分県日出藩史料3 凶跡考 その3』佐藤 曉編

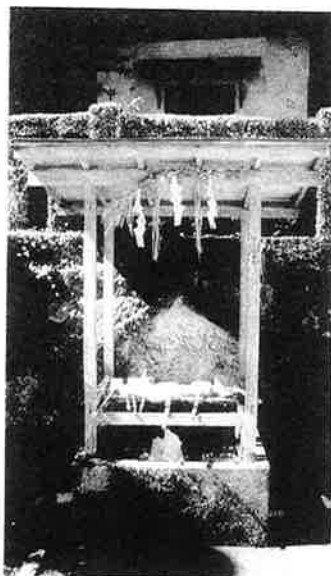
日出藩史料刊行会 一九六八年

『大分県郷土伝説及民謡』大分県教育会編

大分県教育会 一九三一年

奇水万太郎清水

別府の氏神八幡朝見神社の拝殿と齋殿の中間の玉がきの元からこんこんと湧く泉水がある。どんなに真夏の旱天が続いても水量の減ることもなく、洪水の折にも濁りを見せない清冽な清水が「コボッ、コボッ」と快調な響



万太郎清水